
夏恋

浅色ミドリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏恋

【Nコード】

N3187A

【作者名】

浅色ミドリ

【あらすじ】

夏休みに里帰りする友花。初めて見かけるホタルをきっかけに南と出会う…。

夏恋

『香田 南』 18歳

市内の専門学校に通う若者。

去年の夏までは……。

「南ー！置いてくよー？」

「はあはあ、ちよつと…待っててばっ」

「はやくしろ〜」

南と一人の女性はそんな会話を交わしながら坂道を駆け上がる。
浴衣姿で二人は人混みから外れたところにいた。

「おつそいぞ〜」

「…美帆」

南は肩で息をしながら美帆と呼んだ女性を見上げる。

「ん？どしたの？」

「僕が体力無いの分かっててやってるだろ、…はあはあ、…まったくもう」

「あら、ばれちゃった」

隠しめせずチロツと舌を出して、笑う。

ひゅーん。

どかーん！

唐突に、二人の背後で花火があがる。

「わー！きれい！！」

花火の光が当たった美帆の横顔が、南にはとても素敵に見えた。

「綺麗だね…」

花の幻想が南を心の底から酔わせた。
このまま二人の時間が続いていくかのように思えた。

「ね。別れよつか。私たち」

駅のホームで、突然美帆は南に告げた。

「…え？」

「好きな人が出来たんだ…。ごめん」

「……」

何も言えないまま、ずっと美帆を見つめていた。

電車が彼女を連れ去った後もずっと、かつての恋人のいた場所をみつめていた。

夏恋2

夏休み。

学生達には潤いの1ヶ月間。

「あつゝ…」

しかし、このだらしない格好で木の陰でうちわを扇いでる少女にはあまり良いものでは無いようだ。

この辺りの地域は熱がこもりやすく、夏はほとんど蒸し焼き状態になる。

白いワンピースで長い髪を麦わら帽子で覆っているその様子はまるで、一昔前のお嬢様のようでもあった。

実際には平凡な家の生まれで、たまたま祖父母の実家の田舎に帰っていたのである。

「虫嫌い…」

意に反して鳴り続ける蝉の声に、より一層暑く感じる。

「あいつも今頃、街で遊んでるんだろうなあ…」

暑さとかましさに顔をしかめながら、あいつのことを思った。

あいつとは、先日別れた彼氏のこと、相手方の不倫が原因だった。

心の底では別れたくない気持ちが少なからずあった。

初めて好きになった人だった。

そして、初めて裏切られた人だった。

「何やってんだろ…」

空は青い。

雲は白い。

「私もこんな澄んだ広大な心持ってたらなあ」

自分の台詞に苦笑する。

「私は…」

昼間の木陰は思った以上に快適だった。

そのままうつらうつらしてきて、彼女の思考はそこで止まった。

み〜んみ〜んみんなみんな。

彼女が目を覚ましたときにはもう夕刻を少し過ぎたくらいだった。

「あ、山は暗くなるんだっけ……」

今まで暮らしていた都会と違って、暗くなると明かりが全くない。だから早めに帰ってこいと親に言われていたのだった。

もたれ掛かっていた木の幹から立ち上がり、軽くおしりをはたくと、麦わら帽子を押さえながら家の方へ走った。

幼い頃はよく来ていた祖父母の実家、今も変わらない景色だけれど、小学校高学年からずっと都会で暮らしていた彼女には迷ってしまいそうなくらいだった。

「田舎で少女失踪……とか……シャレになんないし……」

一人ゴチる。

息を切らせながら、川沿いの丘を駆けていった。

もうすっかり暗くなり、辺りは夜が押し寄せていた。

しかし予想していた以上に、周りの風景が、山が、木々が、道が見えた。

星や月の光が照らしてくれたためである。

蛍光灯育ちの彼女にはちょっとした感動でもあった。

ふと横を見ると、河原の辺りに光が集まっている。

（……なんだろう？）

興味深くそつと近づくと、その光は動いていた。

「キレイ…」

「蛍を見たことがない？」

「っ?!」

飛び交う光の中に、突然人が現れたように見えた。

実際には、始めからそこにいたのだが、彼女が光の方に夢中で気づかなかった。

相手は苦笑しながら言う。

「そんなに驚かなくても…」

「…あ、ごめん…なさい」

川辺に光の中で立っている目の前の見知らぬ人が、妙に幻想的に見えた。

「…あの…ホタルって…？」

「あははは、そうか！蛍を知らないんだ」

笑われたのが何となく不愉快でむすつとして睨みやった。

「あ…はは、ごめんごめん。蛍っていうのはね、その、これ、飛んでる光！」

声の主は楽しそうに続ける。

「まあ虫の一種なんだけど、こうやって夜には光って飛ぶ夏の虫なんだよ。てつきり地元の子かと思ってたから、ごめんね?」

「あ、うん…いいですけど…」

睨み付けたのが分かったらしい。

こちら側からは相手の表情は逆光になってるらしく見えなかった。

「ホタル…」

月明かりの下の幻想的な光。

まるで吸い込まれそうな空間にいるようだった。

夏恋3

「こんなキレイな虫、都会にはいないから…」

「そうだね、都会の虫は汚れてる…。虫も、空気も、人間も…」

その声が妙に悲しそうに聞こえたのはどうしてだろうか。

「あの…?」

一瞬だけこちらを向いて微笑んで、また蛍達の方を向いて、その人は言った。

「蛍っていうのはね、自然の川辺、それとても綺麗な川でしか生きられない虫なんだ。籠に入れて都会に連れて帰っても、そう長くは生きられない。そして年々自然が減って…環境も悪くなってきているから蛍の数も減ってきている」

確かに年々自然は減っている。

しかし、見回せば山ばかりでとても自然が減少してるようには思えない。

「……こんなにキレイなのにね」

また声が悲しくなった。

「ま、そんなことはどうしようもないからどうだって事じゃないけどね」

一変して声がさっきの調子に戻った。
少女はさっきのが聞き間違えたのかと耳を疑った。

「蛩ってこつやって手を伸ばすと寄って……ってあわああ」
「あつ！」

足下の石に躓いて、転びそうになったその人を助けようとしてこつちも躓いたため、二人とも川に落ちた。

「……」
「……」

一瞬何が起こったか分からず、お互いを見て呆然としていた。
数秒送れて、二人同時に笑い出した。

「ぷ」

「あははは！まさか君まで落ちてくるなんて、ははは」

「……はあはあ、だって、落ちそうだったからつい、あははは」

川の水は意外に浅かった。

足の膝くらいまでの水位で、夏の川の水がほどよく気持ちいい。

「もうずぶ濡れだなあ……。っと」

と言って立ち上がり、まだ座り込んでる少女の方へ歩いてきた。

「大丈夫？」

そう言って手を差しだした。

「あ…、ありがとう…」

手を受け取り、立ち上がると目と目があった。

「君、名前は？」

「『三上…友花』」

「僕は香田 南。友花ちゃんしばらくこの山にいるの？」

「私は、夏休み中はこっちにいるから…」

「そっか、僕もしばらくこっちにいるからまた会つかもね」

南が微笑むと、友花も自然と顔が笑みの形になった。

「って、うわあ…すっかりずぶ濡れだな…濡れたままだと風邪引くからもう帰ったほうがいいよ」

「うん、そうする…クシユン！それじゃまたね、南さん！」

「あはは、お大事に」

苦笑を浮かべながら南は手を振った。

夏恋4（前書き）

すみません、書き直しました…。前のよりもだいぶ、感情移入しやすくなったと思います（？）

夏恋 4

あれから二日。

またあの人に会えるかもしれないと思って夕方に蛍の河原へ通っていた。

しかし、その人は現れず、あの時見た蛍も見かけなくなった。

「夢見がちな少女…か」

自嘲気味に笑ってみる。

友花は夕方の川の底をのぞき込んだ。

長い髪をピンで留めた女が映っている。

「…不細工な顔」

川面に映る自分を見てそう言う。

何となく子供扱いされてたのは気に入らなかったけど、話をしていて妙に楽しかった。

夜の影のせいであまり顔は覚えてないが、蛍の光で神秘的にも見えた。

自分でも分かってる。

どうせ一時の空想に過ぎないことくらい。

「夢の空を歩く君の そばにいるガラスの靴は 離れられないだけなんだ」

昔聞いた歌のフレーズを口ずさむ。
もうなんていう歌かも忘れた。

歌っている人ですら覚えてない。
でも、それが今の気分だった。

「少女は川原佇み 空虚を想う ここが命の始まるの場所とも知らず 君は唄う」

ふと背後から詩が聞こえた。

びつくりして振り返ると、こないだの人が空を見上げていた。

「あ…こんにちは」

「こんにちは。また会ったね」

軽く挨拶して南は横に座った。

その距離が微妙に友花には恥ずかしかった。

「聞いて…ました？」

「うん、いい声だね」

「…!!」

南は笑ってみせたが、友花は自分が赤面してるんじゃないかと思うくらい体が熱かった。

（はずかし…）

必死でごまかそうと話題を振る。

「あ…命の始まるの場所？」

「あ…、うん」と…あまり深く考えないで」

今度は苦笑い。

「う、うん」

「友花ちゃん、だったよね？」

「はい…？」

「よくここに来るの？」

言われてちよっとドキツとした。

目の前の人に会えるかもしれないって思ってたなんて言えない。

「あ、うん…。時々」

内心の動揺を隠そうと必死で笑顔を作った。

「へえ、そうなんだ。僕はこないだの会った夜、あの日に来たばっかりなんだ」

「あ、私も」

「え？」

「私もその日にこっちに来て、おばあちゃんの実家がこっちだから友花は、南がだいぶん前からいたのかと思った。意外な接点を見つけられて少しうれしかった。」

「そつか、おばあさんがいるのかあ。夏休み中ずっとこっちに？」

「うん。ずっと」

「1ヶ月も友達と会えなくて寂しくない？」

「いつものことだから」

そう言っ立ち上がって川面を見た。

「それに、今は誰とも会いたくなかったから」

二人の間を夏の風が通りすぎる。
河原の風はひんやりとして心地よい。

「そっか、ごめんね」

「あ、違うんです！南さんは違うんです！…その、友達に会いたく
なかったっていうか」

立ち去ろうとしてたところを、慌てて友花が止めた。
初対面に近い南に誤解されなくなかった。

「あ、うん。…そゆときつてあるよね。スランプになってたり、周
りのごちゃごちゃしたことがやになったり、好きな人にフラれたり」
「私、ついこないだフラれたんです」

「…え？」

話題を変えようとしてただけだったのに、いきなり爆弾を引いてし
まった。

ともあれ、南は気まずい気分になった。
謝ろうとしたら、友花が先に口を開いた。

「あ、大丈夫ですよ。南さんは気にしないで」

「あ、うん…」

そう言われては黙るしかなかった。
彼女なりの配慮だろう。

「彼とは、2ヶ月付き合ってた。優しくて、大好きでした。で
も…」

そう言つて、友花は川岸のぎりぎりまで来て、しゃがみ込んだ。

「彼…、浮気してたんです。ファミレスで別の女の子とキスしてるの見ちゃつて、問いつめたら…」

「…」

「そういう堅苦しいのウザいって言われて、お前と一緒にいると息苦しいって言われて、逆ギレされて、別れちゃいました」

ぴちゃん。

見ると、川に波紋が広がっていた。

友花が川に石を投げ込んでいた。

彼女は立ち上がると、川に向かって急に大声で叫んだ。

「ばかやろ～～～！」

振り返った友花の顔は笑っていた。

「あゝ、すつきりした。やな男っているもんだね」

笑顔で南の隣に座った。

南にはその顔が強がりだと分かった。

「なんであんなやつ好きになっちゃったのかな。私ってばかだね」

友花は背伸びをして背中から後ろに倒れ込む。

ごつごつした石の感触があつたけど、特別気にはならなかった。服が汚れるのも気にならなかった。

「はあ…、なんでだろ」

オレンジ色の空が自分の心を映してるようにも思えた。
南は何も言わずに、そんな友花の顔を見てる、優しいような、悲しいような表情で。

「…南さん？」

その顔に違和感を感じたのは何故だろう。
不思議な違和感だった。
でも悪いものじゃない。むしろ心地よかった。

「ほんとに彼のことが好きだったんだね」

言われて、心がズキンときた。

心の奥を見透かされたような気分になってた。

「実はそんなに好きじゃなかったのかも」
「自分を誤魔化しちゃだめだよ」

そう強がってみせたのも分かってるような表情、声のトーン、言葉。
自分の心の内が知れるのが怖くなって、頭に血が上る。
上体を起こして反論しようとした。

「そんなこと！」

「僕は…」

決して強くはない、大きくもない声に友花の言葉は中断された。
一呼吸置いて、南が口を開いた。

「僕は笑ったりしないよ。君と同じだから」

その言葉の意味が友花には分からなかった。

「君には、自分に正直でいてほしいから」

その南の言葉の意味はよく分からなかった。

でも、友花は流れ出る涙を止めようとしなかった。

いつの間に流れていたのだろう、気づいたら南に泣きついていた。

少しだけ、なぜ初対面の彼を探していたのか分かったような気がした。

夏恋 5

たくさん泣いた。

友達の前でもこんなには泣かない。

でも、彼の前では・・・。

（なんでこんなに泣いちゃったんだろう…）

不思議と、南には好意を持っていた。
なぜかは分からない。
前の彼氏にフラれて精神的にまいってるはずなのに。

（南さんというと、胸が高鳴る・・・）

今は南の座ってる隣で横になっている。
落ち着いてみると、こんなにも人の前で泣いたことは無かった。
なんだか急に恥ずかしさがこみ上げてきた。

「冷えてきたし、そろそろ帰りつ……！！！！？」

声を掛けようとして南の方に顔を向けると、友花の肩に南が寄ってきた。

「あ、あの……?!」

突然のことに戸惑ったが、様子がおかしかったので顔を覗き込むとその顔は青白かった。

「だ、大丈夫ですか?!」

「あ、はは……ごめんね、だいじょうぶ……だから、ゴホッゴホッ」

「何言ってるんですか！体もこんなに冷たく……え、あ……と、き、救急車！すぐ呼びますから！！」

大丈夫なんて無理しているが、危険な状態なのは目に見えていた。夜風に長く当たっていたせいか、体も冷たい。

「南さん……みなみさん……」

しばらくして南はふもとの病院へ搬送され、緊急の手術が行われた。友花は手術室の前のベンチに座り、体を震わせていた。

(私のせいだ・・・ずっと夜風に当たって・・・ずっと私に付き添って・・・)

涙が溢れてきた。

どうしようもない、どうすばいいのか。

行き場のない大粒の涙は友花のほおを伝って南の顔に落ちた。

夏恋6（前書き）

少し不思議な物語。

夏恋 6

(行かないで……美帆……)

扉が閉まって、それは彼女を連れて行く。

ガタンゴトン、
ガタンゴトン、

(どうして……)

「さよなら……」

そう言った彼女は無表情だった。

どうしてそんな事を言うのか、自分が何をしたのか。
なぜ、どうして、そんなことばかりが頭の中をぐるぐる渦巻いてい
た。

電車が彼女を連れ去ってしまった。

まるで母親とはぐれて迷子になった子供のように、ずっと一人で立
ちつくしていた。

何がどうなってしまったのか分からなくて、ただ彼女が遠くへ行っ
てしまう気がして。

それだけが分かって、それがとても悲しくて。

(美帆おおお!!!!!!!!!!!!!!)

いつの間にか、辺りは暗くなっていた。

(どこ・・・？おかあさん・・・？どこ、どこ？)

暗い道をひたすら走って探し回る。

(ハアハア・・・い・・・やだ・・・こわい・・・！！！！)

どこまで走っても続いていく闇。

止まったらもう動けなくなってしまういそうな気がした。

何に追われてるのは分からない。

でも何かに追われている気がした。

怖い何か。

連れ去ってしまいそうな、何か。

捕まってしまうたらもう逃げ出せない。

(いやだ・・・いやだ)

どうして逃げなければならぬのかなんて分からない。
なぜ追われているのかも分からない。

(こわい・・・こわいこわいこわい・・・！！！！)

ひたすら怖い何かから逃げた。
走って、走って、どこまでも走り続けた。
不意に足下がとられて、転んでしまった。

（あし・・・うごいて・・・うごけ、うごけ！うごけえええ！！）

辺りは一面の真っ暗な闇。

音は自分の声しか響かない。
寒くもないし、暑くもない。
風も吹かない。

それでも。

その何かが近づいてくる気配だけはある。

息苦しい、とてつもなく怖い。
嫌なモノ、ただそれだけは感じる。

そうして、闇が蔓のように足に絡みつき、伸びていった。
絡みつく闇を振り払おうと体を動かすが、走り疲れきった足は、手
は、言うことを聞かない。

（やだ、いやだ、いやいや！！・・・い・・・やあ・・・）

闇の蔓は全身を覆い尽くし、そのまま見えない闇に引きずり込んで
いった。

（うあああああ！！！！！！）

夏恋7

「……ん。……みさん！」

(……)

「南さん！」

はっとして、目が覚めた。

「南さ……ん……」

声のした方を見ると、友花が心配そうに泣きながら、こちらを見ていた。

「よかったあ……」

「友花……ちゃん？」

そう言つて、寝ている南の体に抱きついた。

一瞬何が起こったのか分からなかったが、少しして落ち着いたらすぐ把握できた。

（ああ・・・戻ってきたんだな・・・）

独特の薬品のおい。

真新しいシーツの香り。

白い壁、白いシーツ

まぎれもない病室にいるのだった。

友花の方を見やると、頬に違和感を感じた。

どうやら寝ながら涙が溢れていたらしい。

それで心配になったのであろう、友花があんな顔をしていたのだった。

「友花ちゃん・・・」

そういつて、彼女の髪を撫でた。

しかし、微動だにしない友花の様子が少し違和感を感じた。

「友花ちゃん・・・？」

「・・・zzzz」

静かに寝息を立てて眠っていた。

突然寝てしまつて驚いたが、ずっと付きっきりで看病なさつてたんですよ、と近くにいた看護師さんが退出際に話してくれた。そつと髪をかき分け、寝顔を覗き込む。

友花の穏やかな寝顔を見て、安堵した。

だが、目の隈や、以前見た時よりだいぶ青白い顔の色に、疲労の色が濃く現れていた。

「こんなになるまで……ありがとう」

ぼつりと呟いた時、ぱつと友花が顔を上げた。

「あ……、私寝ちゃつて……」

南の顔を見て少し恥じらい気味に目を伏せた。
突然、友花を抱き寄せ耳元で呟いた。

「うん、ずっと僕のことを見てくれてたんだね……。ありがとう
う……」

それを聞いて安心したのか、南の腕の中で再び眠りについた。

夏恋 8

緩やかな日差しが真つ白なシーツの上に降り注ぐ。

窓の外から見える庭は自然が多く、時折小鳥のさえずりすらも聞こえてくる。

「お水、取り替えてきますね」

窓際の花瓶を持ち、友花は蛇口のある方へ向かった。

南は花瓶の無くなった窓を見つめる。

真つ白な雲が四角く切り取った青い空に映える。

清々しい陽光が、今は逆に眩しいくらいだ。

「何見てるんですか？」

花瓶をもとあつた場所に置き、同じように窓から空を見上げた。

「うん、特に」

そう言つて友花に微笑んでみる。同じように友花も微笑みを返す。

少しだけ、穏やかな時間が流れた気がした。

「ゴホッ、ゴホッ」

「南さん!？」

咳き込む南に駆け寄った。

心配そうに見つめる友花に南は

「大丈夫」と笑ってみせた。

咳がおさまった南を、友花は暫く無言で見つめていた。

「……………どうしたの？」

「南さん」

意を決したように、友花はずっと気になってた事を聞いてみた。

「南さんの病気って、そんなに悪いの……？」

南は、友花を見つめたまま固まった。

しばらくして、南は重い口を開いた。

「…僕は、末期癌なんだ」

そう告げて、精一杯笑ったつもりだった。

けれど友花には、とても辛そうな顔に見えてならなかった。

そして唐突に、南に抱きついた。

なぜだか自分の事のように不安になった。

「南さん…」

「ごめんね、友花ちゃん…」

友花の髪を優しく撫でる南の頬から涙が流れていることに、南自身も気付いてなかった。

夏恋9

それから色々南自身の事を語ってくれた。

2年前までは至って健康だったが、突然身体の調子が悪くなり、病院で検査したところ末期の癌だと診断されたこと。

そのせいで病院暮らしを続けていたこと。

今年の夏は体調が良かったので外出を許可され、あの山にいたこと。

元々は友花と同じ都会育ちだが、小さい頃から自然は好きだったので雑学は多いとのこと。

「もうホタルもいないのかなと思ってたんだけど、あんなにたくさんいたんだね」

「うん」

もう余命幾月もないというのに、どうしてこの人はこんなに笑っていられるのだろう。

そう思うとどんどん胸が締め付けられる気がした。

彼の笑顔は好き。

でも今はとても、切なくなる。

友花は無性に泣きたい気持ちを必死に抑えていた。

口数の少ない友花の様子を、少しだけ目を細めて眺め、また視線を病院の壁の方へ向けて南は言う。

「末期癌だって、親から聞かされた時さ」

『癌』という言葉に反応して顔を上げる。

「正直なところ、やっぱり怖かったね。……あ、でも最初のうちは何だか実感なかったもんだから戸惑ってたけど」

やはり少し苦笑いで話をする。

「日が経つにつれて、ずっと病院のベッドの上だから嫌でも考えちゃうんだよね。もうすぐ死んじゃうのかなって。そうするとやっぱり、怖くなっていくんだ」

「南さん……」

「その思いも吹っ切ろうと思って、体調が良いつて言われたから必死に先生をお願いしたんだ。洪々OKだしてくれてね。それで」

友花のほうを見ると、今にも泣きだしそうだった。

「君と出会った」

南が作った精一杯の笑顔だった。

「うん」

その笑顔に応えたかった。

その人が好きだった。

胸が、苦しめられる想いが溢れそうだった。

笑顔の主は続ける。

「海にも…行きたいな」

「海？」

「うん、海」

「……また、行けるよ！」

そうだね、そう言っですぐに気を失い、南は再び集中治療室へ運ばれた。

夏恋10

幾つもの冬を越し、春を過ぎ、また夏が訪れた。

セミはせわしく、夏を告げる。

今年もどうやら暑くなりそうだ。

それはいつもよりうるさいセミの声が示してくれる。

あれから私は高校を卒業して、彼と同じ専門学校へ行った。

特別、何か目標があったわけでもなく。

けれど、同じ時間を辿ってみたい、そんなロマンチストな考えは誰にも言えない。

「あれー？友花泳がないのー？」

「うんー、ちょっと描きたい絵があるからー」

砂浜の向こう側の友達に返す。

今日は学校の友人と海に泳ぎに来ていた。

パラソルの下で手帳サイズのスケッチブックを開く。

海に来たのは、泳ぐためでなく、海を描きたかったから。

手術は夜中だった。

いつの間にか寝ていたらしく、目が覚めた頃には夜明け頃だったがそこで目にしたのは、管に繋がれた南ではなく、もう目の開

かない彼がそこにいた。

手術は成功した。けれど、1時間したらまた容態が急変し、そのまま息を引き取ったという。

どうしてという思いと、涙が止まらなかった。

南の両親から、一枚の絵を渡された。

あの子がもし死んだら渡してほしい、とそう告げられて。

そこに描かれていたのは、夜の山の景色に、川縁。そして幾つものホタルたち。

その絵は今は友花の部屋に飾ってある。

海を描く手を止め、一息いれる。

空を見上げると、日差しの眩しさに目を細める。

「私は、彼の生きた証を忘れない」

青々とした空は、どこまでも繋がっているようだった。

夏恋10（後書き）

長い時間かかりましたが、なんとか終了しました。
最後までお付き合い頂きありがとうございます。
最後の方はやつつけ感たつぷりですが、また別の作品でお会いしま
したらよろしく願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3187a/>

夏恋

2011年1月1日02時46分発行